

潰されたテントを後にして、近くの山小屋に駆け込んだ。僕は、事の一切切を小屋の主人に吐き出すように話し終えて、ようやく恐怖心がおさまった。加えて昨夜来の雨も上がり、気分がすっかり初期化したようになってテントの後片付けや朝食の支度に取り掛かったのだ。

そしていよいよ、双六岳から縦沢岳そして西鎌尾根を経て憧れの槍ヶ岳へ向うことになった。

ひたすら、たたなずく峰々の先に尖る槍ヶ岳を目指した。

窮地を脱して、寝不足ながら気分は生き返った。

僕らが踏みしめる尾根は、時には花崗岩の岩稜地帯を縫い、時には平坦な松帯に踏み入り、お花畑に癒されながら、ゆったりとうねりながら続



六十年ぶり、山旅の旧友と再会！ 文集がきっかけ

いた。足元には花崗岩の風化した真砂が白い道を成し、頭上の天空は仰げば仰ぐほど碧さを増し、清々しい大気に包まれて、僕らはそのふところの中に深々と溶け込んだ。行く道の先には、まあるい山容の双六岳、やや鋭角にそそり立つ縦沢岳が右に左に大きくなって、その先に黒々と聳える尖りが見え隠れする。

まさに天空を分かち稜線を、ふたりは蟻のごとく黙々と歩いた。

昭和三十六年、二十一歳、大学三年の夏。北アルプスのほぼど真ん中最深部に位置する三俣蓮華岳（標高二八四一m）にいきなり取り付いて天空を二分するような山稜を伝って憧れの槍ヶ岳を目指そうというプランを立てた。

小学校以来の親友下赤君に、高校の級友保田君等四人と入念な山の準備をした。しかし下赤君が床に伏す事態となって不参加、結局安田君と二人きりの出立となった。

テントや自炊用具、十日を超える食料を二人で分担してもザックは各々三十キロ弱はあったろうか、地面から立ち上がるには一人では到底無理な重装備で、しかもおおよそ筋肉らしきを身に纏っていない瘦身の僕には今後の体力が持つかいささか不安にもなったが、見送りの下赤君ら残留組の見送りを背にきりりと前を向いたのだ。

僕は山好きながら、語るほどの登山経験をしていないが、この山旅は勉強不足と計画性を欠いて怖さ知らずで邁進し、怖さと幸運と充足感を心底味わった人生の縮図のような体験となった。

今はもう閉ざされた開設間もない伊藤新道におけるあわや滑落、雨中深夜に受けた熊の襲撃、南に超然と浮かぶ富士山を眺望した槍ヶ岳の頂き、テントを開け放って滞在した涸沢カールの満たされた日々…その思い出を、遠くなった記憶を辿りながら、なんとかかまとめ上げた。

それを先ず下赤君に読んでもらった。開口一番、恨んでるよ！あの時自分はずでに回復していたのに、君がその身体では無理だと断固として留めたのだ。今も親しくして久しいが、その話に及ぶと必ず恨み節を聞かされる。

そして、出来れば相棒となった保田君には訂正や補筆・加筆を頼んで完成させ、共有したいと願うようになった。

このウェブ上で、安田君に呼び掛けてみた。

二〇二一年一月九日付け「ここで、皆さんに会えるんですね！」の項で下手な短歌もどきの最後に、

・訪れし北ア縦走共にした保田さん今どうして頂きますか？

・その時の苦行纏めた紀行文貴君に読んで頂きたくて
何の音沙汰も得られないまま、今年六月初旬、今道さん経由で幹事の村田さんに尋ねると、文集「樫の香」の購入者名簿から、保田君の連絡先が判明。拍子抜けするほどの手早さで辿り着いた次第。

電話の向こうの保田君は、興奮気味の嬉しそうな弾んだ声で、往時をありありと記憶に留めているような話しっぷりであった。執筆は大事な記録として遺して置きたいという。再会はこれからである。